ご法事から気づく命の縁

暖かい四月に入りました。おかげで桜の開花も早く、当山境内地の桜も二日には満開になりました。ただ、一日が日中晴れでしたが、二日からは連日の雨、特に三日は六十五ミリメートルの雨と強風で、満開の桜も散り始め、今日（八日）は一部葉桜になり、満開の桜を愛でることもできませんでした。残念！

四月に入り当山の花見の縁はありませんでしたが、ご法事で尊い「命の縁」について考えさせていただくご縁がありました。

それは行年四十歳でお亡くなりになられた方の二十五回忌のご法事でした。

五人兄弟の末っ子で二十四年前の二月にガンの手術を受けられましたが、残念ながら二カ月後にお亡くなりになられました。

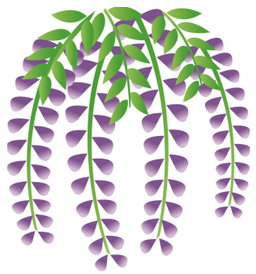
お兄さん（長男）が家を継がれています。お兄さんも弟さんと同じ日にガンの手術を受けられ、手術の功あり生存されてます。

ご法事には長男ご夫婦、次男と三男がいらっしゃいました。当山とは家が近くで小さい頃から親しくさせておりましたので、ご法事の後に葬儀がなければ私もお斉をご一緒し、昔話などしながら過ごすつもりでしたが、その縁がありませんでしたので、法衣に着替えながら、長男のTさんとしばしお話をしました。

その会話の中でTさんは「同じ日に手術をして私だけ命の縁があったので、いただいた命、弟の分も一生懸命生きていかなければと思ってます」とおっしゃいました。

ありがたい言葉ですよね。ともすれば「あって当たり前の命」と思い、過ごす日々です。いただいた命の尊いこと、いただいた命の不思議な縁に思いをいたすことなどないのが普通です。

お釈迦さまは弟子の阿難尊者にガンジス川の河原に立たれて、足元にある砂を右手で一つかみされ、「阿難よ、足元にあるたくさんの砂は迷いの世界にいる者をあらわし、右手で一つかみした砂はその中、人として命をいただいている割合を示している」とおっしゃいました。さらに右手の砂を左手親指の上にこぼされ、「阿難よ、左手親指爪の上の砂は人として命をいただいた中仏法に出会うことのできる割合を示している」と続けられました。



お釈迦さまは迷いの世界を出て悟りの国に救われていくには仏法に出会い、仏法に帰依していかなければならないことをこの譬えの後に阿難尊者におっしゃられたのです。

人として命をいただくことはきわめて出遇い難く、仏法に出遇うことは更に難しいことなのです。

Tさんの家庭は昔からお念仏の薫りただよい、仏法聴聞をたしなまれています。そのような家庭で育たれた弟さん、今は安養のお浄土から娑婆に還り来て「還相の菩薩」として尊いおはたらき・お導きを届けて下さってます。

残られたご兄弟の皆さん方が「弟よ、お前のおかげでいただいた命大切に生きてきたぞ、お前の分もの命であったぞ、お前のおかげでお浄土への念仏三昧の道をしっかり歩ませていただいたぞ」とお浄土での再会に報告できますようお念じ申すことです。

法語の世界

《原文》

御門徒衆上洛候ば、前々住上人、蓮如仰せられ候ふ。寒天には御酒等のかんをよくさせられて、路次の寒さをも忘られ候ふやうにと仰せられ候ふ。また炎天の時は、酒など冷やせと仰せられ候ふ。御詞をくはられ候ふ。また、御門徒の上洛候ふを、遅く申し入れ候ふことくせごとと仰せられ候ふ。御門徒をまたせ、おそく対面することくせごとのよし仰せられ候ふと云々。

（『蓮如上人御一代記聞書』二百九十五）

《現代語訳》

ご門徒の方々が京都にやって来ると、蓮如上人は、寒い時には、酒などをよく温めさせて、「道中の寒さを忘れられるように」と仰せになり、また、暑いときには、「酒など冷やせ」と仰せになりました。このように上人自ら言葉を添えて指示されたのです。また、「ご門徒が京都までやって来られたのに、取り次ぎがおそいのはけしからんことだ」と仰せになり、「ご門徒をいつまでも待たせて、会うのがおそくなるのはよくない」とも仰せになりました。

四月八日は花祭り（灌仏会）

四月八日はお釈迦さまが誕生された日で、正式名称は灌仏会、お釈迦さまの御誕生をお祝いする日です。

お釈迦さまはインドのルンビニーでお生まれになり、お生まれになるとすぐに七歩歩まれて右手で天上を指さし、「天上天下唯我独尊」と言われたと伝えられます。

七歩歩まれたのは、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天（六道・迷いの世界）を超えた存在であることをあらわし、「天上天下唯我独尊」と言われたのはご自分だけでなく、「天上でも地上でも、それぞれの私が一番尊い」とすべての命が尊いと宣言されました。